

米づくり情報 (NO. 9)

令和5年8月9日

伊万里・西松浦地区農業技術者連絡会作物部会

1 気象概況 (アメダス観測地：伊万里)

月	半旬	平均気温		最高気温		最低気温		降水量		日照時間	
		平年値 ℃	本年値 ℃	平年値 ℃	本年値 ℃	平年値 ℃	本年値 ℃	平年値 mm	本年値 mm	平年値 時間	本年値 時間
7月	5	27.2	28.2	31.6	33.6	23.9	24.4	39.1	13.0	32.3	25.7
	6	27.6	28.8	32.1	35.2	24.2	24.4	44.3	0.5	41.4	53.0
8月	1	27.8	30.3	32.5	37.0	24.2	25.4	34.7	0.0	34.9	51.1
	2	27.8	—	32.5	—	24.2	—	38.7	—	33.4	—
	3	27.5	—	32.2	—	24.1	—	44.0	—	30.8	—
	4	27.1	—	31.7	—	23.7	—	46.2	—	28.9	—

【7月5半旬～8月1半旬の気象概況】

- 1) 平均気温は、平年と比較して 1.0～2.5℃程度高く推移した。
- 2) 日照時間は、平年より長く、平年比は 120%であった。
- 3) 降水量は、かなり少なく、平年比は 11%であった。

2 生育状況 (8月8日)

項目 品種(設置場所)	年次	草丈 cm	茎数 本/m ²	主稈 出葉数 L	葉色 SPAD	概要
夢しずく 6/2 移植 東山代町脇野	本年値	出穂期 8月4日				・平年より 1日早く出穂
	平年値	出穂期 8月5日				
	平年比	-1日				
ヒノヒカリ 6/19 移植 松浦町桃川	本年値	73.0	374	12.5	39.7	・草丈は、平年よりやや低い ・茎数は、平年より少ない ・主稈出葉数は、平年よりやや少ない ・葉色は、平年より濃い ・幼穂長 10mm
	平年値	78.8	464	13.0	37.4	
	平年比	93	81	-0.5	+2.3	
たんぼの夢 6/17 移植 松浦町桃川	本年値	69.9	312	13.0	41.0	・草丈は、平年並み ・茎数は、平年より少ない ・主稈出葉数は、平年よりやや多い ・葉色は、平年より薄い ・幼穂長 4mm
	平年値	72.2	476	12.5	42.1	
	平年比	97	66	+0.5	-0.9	

(耕種概要)

- ※ 夢しずくの耕種概要は稲作情報 No.1、ヒノヒカリ・たんぼの夢の耕種概要は稲作情報 No.3 を参照。
- ※ 茎数の本年値 (ヒノヒカリ、たんぼの夢) については、栽植密度が平年より小さく、移植後の日照不足、断続的な降雨による深水、ジャンボタニシの食害等の影響が大きい。

3 今後の管理

1) 山間早植え水稻（5月上中旬移植）

- ・乳熟期を迎えている。
- ・カメムシの防除を徹底するとともに、収穫 1 週間前までの間断灌水により子実の充実確保に努める。

2) 普通期水稻「夢しずく」

- ・出穂期～穂揃い期を迎えている。
- ・穂ばらみ期から穂揃い期にかけては、イネの用水要求度が高い時期であるため、水が切れることがないように湛水管理を徹底する。
- ・この時期は強風による影響を最も受けやすい時期であるため、台風の接近等が予想された場合には可能な限り深水とし、強風による葉先の裂傷や籾擦れなどの被害を緩和するよう努める。

3) 普通期水稻「たんぼの夢」、「ヒノヒカリ」等

- ・幼穂形成期を迎えている。中干し作業は終了し、間断灌水へ移行する。
- ・穂肥の施用は、次の診断基準をもとに行う。ただし、「いもち病」の発生が上位葉で確認された場合は、穂肥施用量を減量する。
- ・ヒノヒカリ、たんぼの夢の穂肥診断基準は下記の通り。

「ヒノヒカリ」の穂肥診断基準

幼穂形成始期の草丈(cm)	葉 色		施 用 時 期		穂肥施用量(kg/10a)	
	群 落	SPAD-502	出穂前日数	幼 穂 長	窒素成分量	BB602
80cm以下	3.0以下	34以下	24～20日前	1～2mm	3.0	18 kg
	3.0～3.4	35～38	20～18日前	3～5mm	3.0	18 kg
	3.5～3.8	39～40	18～14日前	5～15mm	2.0	12 kg
	3.8以上	41以上	16～13日前	15～30mm	1.0以下	6 kg
80cm以上	3.0～3.4	35～38	20～18日前	3～5mm	2.0	12 kg
	3.5～3.8	39～40	18～16日前	5～15mm	1.5	10 kg
	3.8以上	41以上	16～13日前	15～30mm	1.0以下	6 kg以下

「たんぼの夢」の穂肥診断基準

幼穂形成始期の草丈(cm)	葉 色		施 用 時 期		穂肥施用量(kg/10a)	
	群 落	SPAD-502	出穂前日数	幼 穂 長	窒素成分量	BB602
65cm以下	3.8以下	39以下	22～20日前	2～3mm	3.0	18 kg
	3.8～4.2	40～41	18～15日前	5～15mm	1.5	10 kg
	4.2以上	42以上	施 用 し ない			
65cm以上	3.8以上	39以下	22～20日前	2～3mm	1.5	10 kg
	3.8～4.2	40～41	18～15日前	5～15mm	1.0以下	6 kg 以下
	4.2以上	42以上	施 用 し ない			

※ 草丈は幼穂の伸長程度より幼穂形成期（幼穂長1mm）を基点に、前後1日当たり1cm増減する。

※ 止葉が抽出し終わった後は施用しない。

※BB602の施用量は栽培ごよみに準じている。

※穂肥は湛水状態で施用し、最低4日間は止水し落水しない

《参考》出穂期の平年値と穂肥施用時期の目安

※移植日と出穂期は過去7年間で上限と下限を除いた5年分の平均

品種	移植日	出穂期	幼穂形成期（1mm～15mm） 穂肥施用時期目安
夢しずく	5月31日	8月5日	7月10日～18日
ヒノヒカリ	6月20日	8月26日	8月1日～9日
たんぼの夢	6月17日	8月28日	8月4日～12日

4) 共通

○主な病害虫の防除適期

病害虫名	稲のステージ 出穂前後日数	防除適期									
		-15	-10	-5	0	+5	+10	+15	+20		
紋枯病	並発生の場合	←→									
	多発生の場合	←→			←→						
穂いもち	並発生の場合			←→							
	多発生の場合			←→		←→					
カメムシ類	並発生の場合							←→			
	多発生の場合					←→		←→			

図3 紋枯病、穂いもち、カメムシ類の防除適期

○いもち病

- ・葉いもちの発生が見られる圃場では、穂ばらみ期の防除を徹底するとともに、発生が多いと予想される場合には穂揃期にも防除を行う。
- ・7月26日までのBLASTAM情報（気象条件のみによって葉いもちの発生を予測するシステム）によると、伊万里では6月8日、11日に葉いもちの感染好適条件が観測されている（好適条件が観測された1週間後に初発生や病斑数の急激な増加が予想される）。
- ・進展型病斑が確認された場合は、速やかにオリブライト剤等で適切に防除を実施する。（ただし、オリブライト剤の使用時期は出穂10日前まで）
- ・窒素過多は発生を助長するので、病斑が見られる圃場では穂肥施用量を減らすなど適切な肥培管理を行なう。



○ウンカ類

- 6/30～7/13 にかけてトビイロウンカの飛来が確認されている（表 1）。この飛来波の今後の発生予測は図 1 のとおりである。
- 今後の飛来状況および気象条件により、発生予測図は随時更新される。
- 防除時期については、今後の飛来状況や圃場条件（移植時期や品種、圃場の場所等）によってウンカ類の発生量が異なるため、注意深く圃場を観察する（ウンカは稲の株元に定着します）。

ウンカ類幼虫の見分け方について

	若齢幼虫の体色	中～老齢幼虫の体色	水面での後脚の出し方
セジロウンカ	白っぽい	灰白の斑紋	 : 真横
トビイロウンカ	白っぽい	薄茶か茶褐色	 : 真横～やや斜め後ろ
ヒメトビウンカ	黄褐色	淡黄色か薄茶か茶褐色 (体側の色が濃い場合あり)	 : 斜め後ろ











		トビイロウンカ	セジロウンカ	ヒメトビウンカ
成虫		 長翅雌  短翅雌		 雌  雄
幼虫	若齢			
	中齢～老齢			

表 1 イネウンカ類のトラップでの捕獲状況（2023年）

月	日	トビイロウンカ					セジロウンカ				
		佐賀県		長崎県			佐賀県		長崎県		
		佐賀市	嬉野市	諫早市	諫早市	諫早市	佐賀市	嬉野市	諫早市	諫早市	諫早市
		ネット トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ネット トラップA	ネット トラップB	ネット トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ネット トラップA	ネット トラップB
6月	1日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	4日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	5日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	6日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	7日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	8日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	9日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	10日	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
	11日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	12日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	13日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	14日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	15日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	16日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	17日	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
	18日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	19日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	20日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	21日	0	0	0	0	0	1	4	0	0	0
	22日	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
	23日	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0
	24日	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
	25日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	26日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	27日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	28日	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
	29日	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0
	30日	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
7月	1日	0	12	0	0	0	0	70	1	0	0
	2日	0	0	0	0	0	0	58	0	0	0
	3日	0	15	0	0	0	0	75	0	0	0
	4日	0	4	0	0	0	0	13	19	0	0
	5日	0	19	0	0	0	1	23	31	0	0
	6日	0	3	0	0	0	0	43	0	2	0
	7日	0	4	0	0	0	2	6	0	4	0
	8日	0	14	0	0	0	0	14	1	0	0
	9日	0	3	0	0	0	1	16	6	1	0
	10日	0	0	1	1	0	0	15		0	0
	11日		2		0	0		10		0	0
	12日		2					3			
	13日		4					3			



幼虫ふかぞろい期が最も防除効果が高い。幼虫が多い時期を狙って防除を行う。

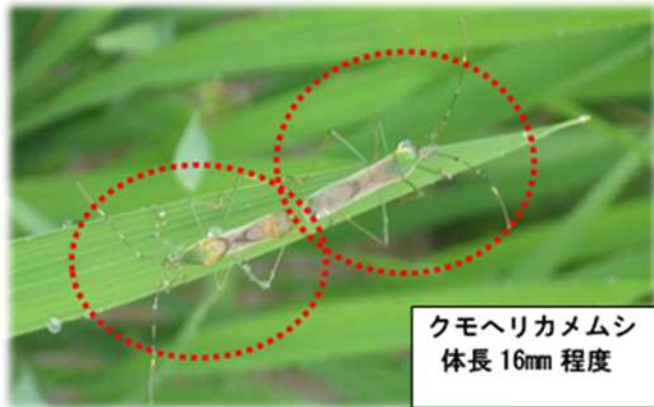
図1 トビイロウンカ各世代の発生予測(第2版、2023年7月25日作成)

1. 6月30日～7月3日頃(図では7月1日)、7月7日～9日(図では7月8日)の飛来虫を起点とし、佐賀市川副町の気温データより算出した有効積算温度(7月25日以降は平年値)を基に作成した。
2. 田植え時期、品種等の違いによって、本虫の発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。
3. 今後の気象経過等に応じて、本図は随時、更新するので、最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。

○カメムシ類

- 耕種的防除として、出穂 10 日前までには必ず畦畔の草刈りを終える。出穂後に行くとカメムシ類が圃場に侵入し、被害を助長する。
- 薬剤防除としては、乳熟期（出揃い期の約 10 日後）の防除を徹底して、斑点米の被害防止を図る。発生が多い圃場では穂揃い期（出穂期の約 5 日頃）と乳熟期の 2 回防除を実施する。

★多発生の目安 ⇒ 20 回のすくいとり調査でカメムシが 5 頭以上の場合



○紋枯病

- 高温年に多発する病気で、前年多発した圃場では、菌核が残り発生しやすい。
- 菌核が水に浮いて移動するため、一般的に水尻付近や風下側に発生しやすい。
- 田回りの際は、株元をよく確認し、発生が見られる場合は防除を行う。
(液剤、粉剤の場合は出穂の 20 日～10 日前が目安)
- 初発は、下部の茎に発生するが、上位に進展し、多発すると、倒伏や充実不足を招く。



令和5年産水稻生育期間気象グラフ (アメダス：伊万里)

西松浦農業振興センター

